臺灣日日新報
昭和十二年十二月三十一日 金曜日 第一万三千五百七十七號 (金曜日)
(第二種郵便物認可)

過誤絶無を期す
英國艦船攻撃事件
英大使に回答手交、

【東京二十日發同盟】レデー・バードに對する外務當局發表

昭和十二年十二月二十八日午前十時半、英大使は佐藤クレーギ英國大使の來訪をレデー・バードに對する外務當局發表

新政權の參加者は 殆ど財界の大立者

經濟擴張第一主義で邁進

事變下の歲末金融

記錄的平穩裡に越年

日銀發行尻二十四億圓を突破

コールは市場始つて以來の低率

本年の地方産業界回顧

農村は裕福、漁村は不況

山村は北部が潤ふ

春高人氣に 島米は躍進

丸糯闇氣配は廿三錢高

移出は意外に多數

節折の御義と除夜祭

嚴肅に行はれた幸顯榮氏の葬儀

臺北高校生徒が新高山中で遭難

谷村督府特産課技師の令息

下山の途消息を絶つ

中野高正君

遭難の報を見失び下山したもの

と思ひつつも過ぴかけて探したが

依然として判明せず、午後六時頃

山の麓等に捜索の行方不明の報

告したタータカ駐在所では直ちに

捜索を開始、急報に依つて二十九

日午前四時阿里山駐在所から捜

査隊が出動し員下大概客中である

時半の急行にて帰京した

詳しい事が判らず心配して居ります

谷村氏夫人語る

したのかとのコースを歩いたの

か詳しいことが判らず心配して

ゐます、主人も昨夜遅延へ行

きました、初め多人数で行かれ

る筈でしたが都合で二人きりになり、

【臺北電話】谷村督府特産課技師の令息で臺北高校生徒中野高正君（一八）は去る廿七日午前八時半頃から同僚の小林君と共に新高山へ登山したまゝ消息を絶つたので、廿九日午後一時頃から捜索隊を組織して捜索に着手したが、三十日正午現在に於ても未だ判明せず、心配されてゐる、中野君は三十日正午頃までに下山する筈であつたが、三十日午後六時頃までに下山しない場合は遭難したものと認めて捜索隊を増加する筈である、又十日の捜索隊は一隊一千人位に達する見込である

心配して居ります

谷村氏夫人語る

よく登つて帰つて来たりして私も安心してゐましたのに廿九日午後十時頃阿里山駐在所から電話の行方不明の報告を受取り全く驚きました、中野さんも一緒だつたさうですがお互の辺でお別れになつたのでせうか、

大スベリ斷崖下に顛落したらしい

現場附近に遺留品

【新竹電話】新竹郡竹東郡では例年比し雪の降一通と言ふ激減であつた為め冬期の特別取扱と為つたが、昨年の二割にも足らぬ

昨年に比べて一割にも足らぬ

新竹局の年賀郵便取扱ひ數

【新竹電話】新竹郡竹東郡では例年比し雪の降一通と言ふ激減であつた為め冬期の特別取扱と為つたが、昨年の二割にも足らぬ、即ち昨年の年賀郵便の取扱数は二万二千四百二通に対し本年は僅に五千九百四十八通に止まつた

出征前の治療代を そつくり香奠に贈る

石原醫師が故林曹長へ

【基隆電話】去る十五日基隆郡の松林花園部落に於て我が高砂族の青年二名が相撲を取つた、手紙は其翌日午前七時三十分、宜蘭消防組では一月一日午前六時頃、警鐘乱打、警戒警報、防空監視に備へサイレン二回吹鳴する、又日本消防組では一月四日午前七時三十分頃出初式場たる木場公園小学校運動場で消防自動車の手動「サイレン」を吹鳴せられるを以て一般部民は空襲警報と誤認せざる様注意せられたい

基隆の市況は 尻上りに回復

【基隆電話】基隆市の経済概況は株式は依然として閑散なるも米穀は一月一日より三十日迄の間に一万二千百三十一万二千四百斤の増加である、又一月一日より三十日迄の間に一万二千四百六十八万千斤の減少である、之に反し石炭は一月一日より三十日迄の間に一万二千四百六十八万千

蒲生三勇士

(77)

龍齋貞丈口演
木俣茂彌畫

妻女の口說きに
新五郎立腹

たき「ちやア最初御承知でさいまして、其アどうも種〻御心配を掛けまして、其で仕舞に安心が出來るか知れません」

其中に女中が酒肴を持出して參りましたら「モウ宜いよ」とおたきが云ふとモウ其つきり誰も來ない。おたきと何ひ合つて酒を飲んで居ります。どうも變だ其合だと思つて居ります。其中におたきの顏が赤くなつて來るに從つて、

腰が崩れてくる。不止騷な挙動をして良く傍へ寄つて來て、

たき「オヤ左樣さん、此の頃澁谷が入つて物騒だと云ふのは、其アお在方の事で町は何でもないんですよ、御所に御新さんと云ふのは外にあるんです、夫の日數を數へて見ると云ふ事を、酒屋酒屋所だつて御存じない筈はございますまい、一人歸を急がして居ましたんですよ、其を不圖に惡つたら左樣さん、可愛がつてお呉んなさい」

と云ひながら、ズツと傍へ寄る。新五郎の膝へ手を掛て、ズーツと身を持つた、新五郎驚愕と惑つて、ビツリ其手を拂ひ除けた。

たき「イ

網「ハイではない何をなさる、失敬な眞似をなさるな、許せ國家國民の威嚴とも云ふ立派な挙止のある其方の身體、第一弟のやうな御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、

蒲生三勇士

(77)

龍齋貞丈口演
木俣茂彌畫

妻女の口說きに
新五郎立腹

たき「ちやア最初御承知でさいまして、其アどうも種〻御心配を掛けまして、其で仕舞に安心が出來るか知れません」

其中に女中が酒肴を持出して參りましたら「モウ宜いよ」とおたきが云ふとモウ其つきり誰も來ない。おたきと何ひ合つて酒を飲んで居ります。どうも變だ其合だと思つて居ります。其中におたきの顏が赤くなつて來るに從つて、

腰が崩れてくる。不止騷な挙動をして良く傍へ寄つて來て、

たき「オヤ左樣さん、此の頃澁谷が入つて物騒だと云ふのは、其アお在方の事で町は何でもないんですよ、御所に御新さんと云ふのは外にあるんです、夫の日數を數へて見ると云ふ事を、酒屋酒屋所だつて御存じない筈はございますまい、一人歸を急がして居ましたんですよ、其を不圖に惡つたら左樣さん、可愛がつてお呉んなさい」

と云ひながら、ズツと傍へ寄る。新五郎の膝へ手を掛て、ズーツと身を持つた、新五郎驚愕と惑つて、ビツリ其手を拂ひ除けた。

たき「イ

網「ハイではない何をなさる、失敬な眞似をなさるな、許せ國家國民の威嚴とも云ふ立派な挙止のある其方の身體、第一弟のやうな御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、

蒲生三勇士

(77)

龍齋貞丈口演
木俣茂彌畫

妻女の口說きに
新五郎立腹

たき「ちやア最初御承知でさいまして、其アどうも種〻御心配を掛けまして、其で仕舞に安心が出來るか知れません」

其中に女中が酒肴を持出して參りましたら「モウ宜いよ」とおたきが云ふとモウ其つきり誰も來ない。おたきと何ひ合つて酒を飲んで居ります。どうも變だ其合だと思つて居ります。其中におたきの顏が赤くなつて來るに從つて、

腰が崩れてくる。不止騷な挙動をして良く傍へ寄つて來て、

たき「オヤ左樣さん、此の頃澁谷が入つて物騒だと云ふのは、其アお在方の事で町は何でもないんですよ、御所に御新さんと云ふのは外にあるんです、夫の日數を數へて見ると云ふ事を、酒屋酒屋所だつて御存じない筈はございますまい、一人歸を急がして居ましたんですよ、其を不圖に惡つたら左樣さん、可愛がつてお呉んなさい」

と云ひながら、ズツと傍へ寄る。新五郎の膝へ手を掛て、ズーツと身を持つた、新五郎驚愕と惑つて、ビツリ其手を拂ひ除けた。

たき「イ

網「ハイではない何をなさる、失敬な眞似をなさるな、許せ國家國民の威嚴とも云ふ立派な挙止のある其方の身體、第一弟のやうな御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、

蒲生三勇士

(77)

龍齋貞丈口演
木俣茂彌畫

妻女の口說きに
新五郎立腹

たき「ちやア最初御承知でさいまして、其アどうも種〻御心配を掛けまして、其で仕舞に安心が出來るか知れません」

其中に女中が酒肴を持出して參りましたら「モウ宜いよ」とおたきが云ふとモウ其つきり誰も來ない。おたきと何ひ合つて酒を飲んで居ります。どうも變だ其合だと思つて居ります。其中におたきの顏が赤くなつて來るに從つて、

腰が崩れてくる。不止騷な挙動をして良く傍へ寄つて來て、

たき「オヤ左樣さん、此の頃澁谷が入つて物騒だと云ふのは、其アお在方の事で町は何でもないんですよ、御所に御新さんと云ふのは外にあるんです、夫の日數を數へて見ると云ふ事を、酒屋酒屋所だつて御存じない筈はございますまい、一人歸を急がして居ましたんですよ、其を不圖に惡つたら左樣さん、可愛がつてお呉んなさい」

と云ひながら、ズツと傍へ寄る。新五郎の膝へ手を掛て、ズーツと身を持つた、新五郎驚愕と惑つて、ビツリ其手を拂ひ除けた。

たき「イ

網「ハイではない何をなさる、失敬な眞似をなさるな、許せ國家國民の威嚴とも云ふ立派な挙止のある其方の身體、第一弟のやうな御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、御者に左樣な事を爲すは、不屆千万、